

TSUBOHORI

平成8年度（1996）
姫路市埋蔵文化財調査略報



姫路市教育委員会

はじめに

姫路平野のほぼ中心部に位置する姫路の地は、畿内から西国に通じる山陽道の要衝として、古くから発展してきました。世界文化遺産に登録された国宝・姫路城をはじめ、瓢塚古墳、壇場山古墳、播磨国分寺跡、書写山円教寺など、数多くの貴重な文化財にも恵まれています。

近年、都市再開発事業や区画整理事業の進展に伴い、埋蔵文化財の発掘調査件数が急増しています。姫路市では市民の皆様には調査成果をできるかぎり速やかにお伝えし、貴重な文化財を共有の財産として保存・継承していくよう努めてまいりました。しかし、発掘調査で得られた全ての情報を報告いたしますまでには、整理や研究に多くの時間が費やされてしまいます。

こうした問題に対応するために、調査の概要を速報する場として本書を刊行いたしました。その内容は必ずしも十分とはいえませんが、調査成果の一端を速やかに公開することにより、本市が行っております埋蔵文化財発掘調査事業について、さらに理解を深めていただければ幸いに存じます。また、本書が地域の歴史をひもとかれる機会の一助となることを願ってやみません。

最後に、発掘調査の実施にあたり、ご指導・ご協力を賜りました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

姫路市教育長
井上 隆 溥

目 次

はじめに	1	4. 下太田庵寺	第2次調査	11
発掘調査の動向	2	5. 坂本城跡	第6次調査	13
1. (仮称)船場川東土地区画整理事業地内遺跡 第6地点11区12区	4	6. 姫路駅周辺遺跡	第4次調査	15
2. (仮称)船場川東土地区画整理事業地内遺跡 第6地点13区	7	7. 北条遺跡	第1次調査	16
3. 天満辺作遺跡 第4次調査	8	8. (仮称)谷内地区圃場整備事業地内遺跡 第1次調査		17
姫路城跡発掘調査の動向	9	こんなものでました 鳥形木製品		18
遺跡を訪ねて 瓢塚古墳	10			

例 言

1. 本書は、姫路市教育委員会が平成8（1996）年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の略報である。なお、特別史跡姫路城跡に関する発掘調査については、『城郭研究室年報』Vol.7において別に報告している。
2. 発掘調査に伴う遺物・図面類は、全て姫路市教育委員会が保管している。
3. 本書の執筆は、各調査担当者が行い、編集は多田が担当した。
4. 各調査地の位置図は、国土地理院2万5千分1図を使用し、方位は全て上が北である。
5. 本書の図面は国土座標（第V系）を基準とし、方位は座標北である。また、標高は東京湾平均海水面（T.P.）を使用した。ただし、坂本城跡調査位置図のみ磁北を使用している。
6. 調査にあたっては、下記の方々・機関の指導・協力を得た。
今里幾次、楢田正信、辰巳一彦、福島敏之、藤原学、松木武彦
下太田自治会
7. 遺物の整理および図版の作成には、岡本桂子、岡本美香、田口啓美、田中章子、中山美歩、藤戸翼、圓尾かさね、宮田耕平、山田郁子の補助を得た。
8. 表紙の写真は、瓢塚古墳を西側から写した航空写真である。

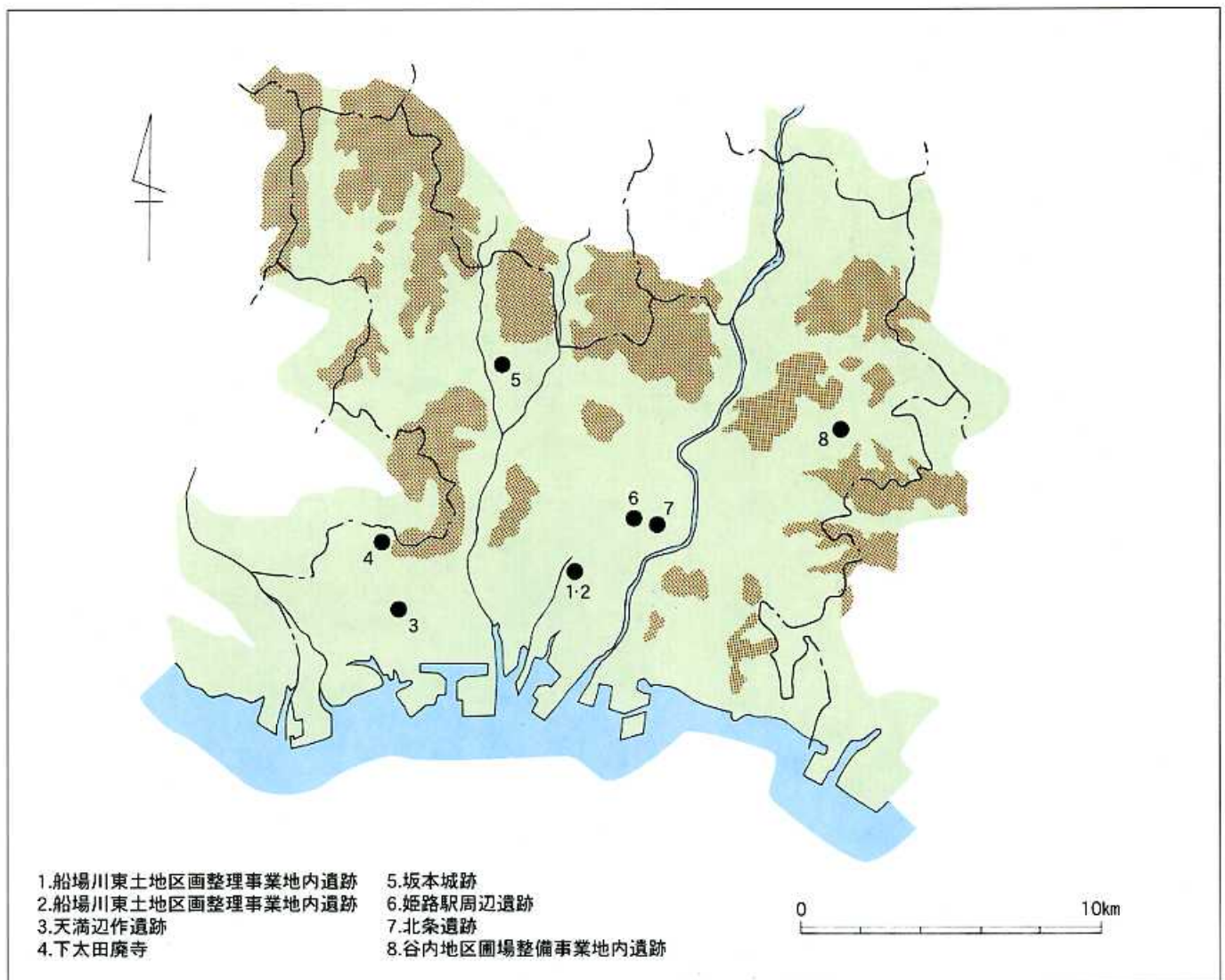
発掘調査の動向

平成8年度は、8件の埋蔵文化財の発掘調査を行った。この中で、土地区画整理事業に伴うものは3件である。そのうち、船場川東と東天満の2ヶ所では、土地区画整理事業に伴う発掘調査が完了した。今後は、平成7年度に発掘調査が完了した大井川土地区画整理事業地内遺跡とともに出土遺物の整理に入る。船場川東では、弥生時代中期～古墳時代にかけての竪穴住居跡が多数見つかかり、その中からは無茎銅鏃などが出土している。

遺跡の確認調査は、下太田廃寺など3件である。平成8年度からは、圃場整備事業に先立つ谷内地区の調査も始まった。下太田廃寺では、北・東限の確認を目指しトレンチ（試掘溝）を設定している。この結果、東限を示すと推定される築地基壇状の遺構を検出した。ただ、北限については明確にできていない。姫路駅周辺遺跡の確認調査では、姫路城外堀の一部が確認された他、近代遺跡の姫路駅関係の遺構や遺物も見つかっている。

その他、住宅建設に伴い、書写・坂本城跡の調査を行い、素掘りの井戸などを検出した。また、御着城跡では、公園整地中に、以前の調査で発見された井戸が再検出され、緊急調査の後、再び埋め戻して保存した。

発掘調査成果の現地説明会は、船場川東土地区画整理事業地内遺跡の第13次調査で、平成8（1996）年10月10日に実施した。また、平成8年度からは、埋蔵文化財調査の略報告の刊行を開始し、平成7年度の発掘成果の一部を報告している。



平成8年度 発掘調査地点の位置図

遺跡名	調査回数	所在地	調査面積	調査期間	調査原因	調査担当者
下太田廃寺	2次	勝原区下太田	247m ²	97.2.4～97.3.28	範囲確認調査	大谷・小柴
天満辺作遺跡	4次	大津区天満字辺作	136m ²	96.6.11～96.7.22	区画整理	多田
坂本城跡	6次	書写字構江	200m ²	96.11.15～96.12.6	住宅建設	秋枝
姫路駅周辺遺跡	4次	朝日町・駅前町	1,270m ²	97.3.1～97.3.28	区画整理	秋枝
北条遺跡	1次	北条	1,800m ²	96.12.1～97.2.28	区画整理	秋枝
船場川東土地区画整理事業地内遺跡 (第6地点11区12区)	13次	飯田字金山田	1,152m ²	96.5.21～96.12.27	区画整理	大谷・小柴
船場川東土地区画整理事業地内遺跡 (第6地点13区)	14次	飯田	391m ²	96.9.10～96.9.30	共同住宅建設	大谷・小柴
谷内地区圃場整備事業地内遺跡	1次	飾東町小原・小原新	500m ²	96.12.19～97.1.30	圃場整備	秋枝
特別史跡 姫路城跡						
内堀浚渫工事	161次	本町68	3,140m ²	95.10.30～96.7.5	内堀浚渫工事	山本
国立姫路病院更新整備 2-2次	162次	本町68	125m ²	96.5.21～96.6.10	国立病院建替	山本
国立姫路病院更新整備 3次	163次	本町68	118m ²	96.5.2～96.6.15	国立病院建替	山本
内京口門	164次	本町68	193m ²	96.7.11～96.9.9	石垣修理	多田・森
国立病院更新整備 4次	165次	本町68	1,040m ²	96.9.2～97.1.7	国立病院建替	山本
お城本町地区市街地再開発	166次	本町68	3,058m ²	96.10.3～97.6.30	市街地再開発	多田・森
中瀬濠浄化対策 2次	167次	本町	60m ²	97.1.8～97.1.22	濠浄化	山本

発掘調査の体制

教育委員会事務局

教育長 井上隆溥

教育次長 森茂樹

文化部

部長 池田宏

文化課

課長 松井敏郎

課長補佐 中山智雄

主任 岸本幸男

係長 秋枝芳利

技師 山本博彦

大谷輝彦

多田暢久

森恒裕

技師補 小柴治子



船場川東土地区画整理事業地内遺跡の現地説明会

1. (仮称)

船場川東土地区画整理事業地内遺跡

第6地点11区12区 (第13次調査)

1. 所在地 姫路市飯田字金山田
2. 調査面積 1,152㎡
3. 調査期間 平成8年5月21日～平成8年12月27日
4. 担当者 大谷、小柴

姫路平野の中程を南流する小川—船場川流域には、縄文時代晩期～古墳時代にかけての遺跡が数多く分布する。代表的な遺跡には、橋詰遺跡、小山遺跡、黒表遺跡、長越遺跡などがある。

船場川の東に位置する地域で、区画整理に伴って行われた試掘調査により、新たに縄文時代晩期～室町時代の遺跡が6ヶ所発見された(第1～6地点)。その後、道路予定地を中心に約7,500㎡～12次にわたる全面調査を行った。第13次にあたる今回の調査で、昭和61(1986)年に始まった区画整理に伴う調査は最終年度を迎えた。

調査地は、平成5(1993)年度実施の7区を挟んで南側(11区)と北側(12区)である。見つかった遺構は、弥生時代中期～室町時代にかけてであるが、中心となる時期は、弥生時代後期～古墳時代と平安時代後期～鎌倉時代である。

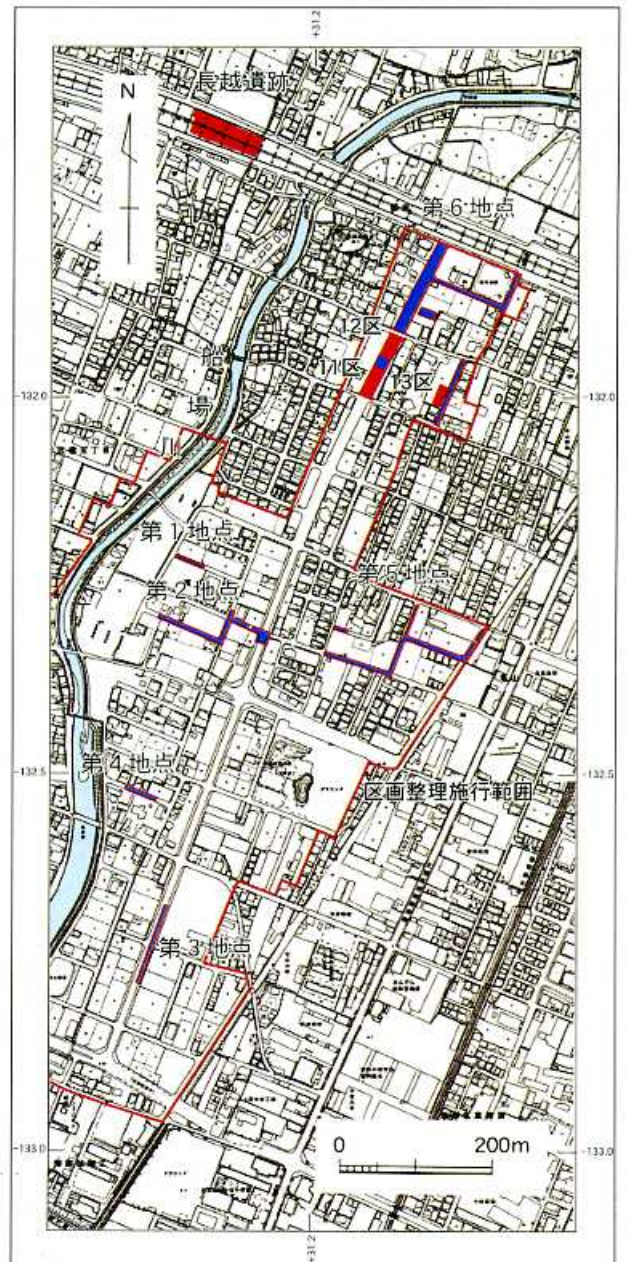
平安時代～鎌倉時代では、300基近いピット、土壙墓、溝などが見つかった。ピットは、径20～30cmで平面円形、掘立柱建物跡の柱穴と思われる。土壙墓には、身長1m程で子供と思われる人骨が東向きに埋葬され、頭部には、副葬品の鉄製刀子や須恵器の椀が置かれていた。



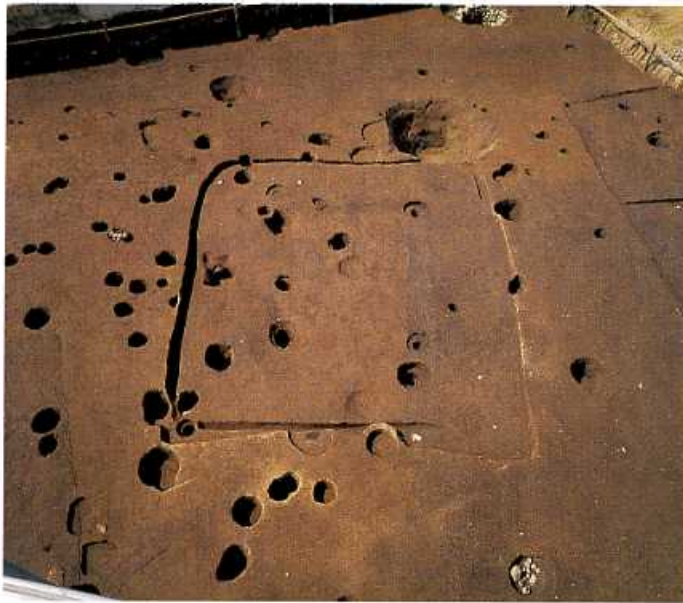
第6地点11区 土壙墓 (北から)



調査地の位置図(「姫路南部」)



船場川東第1～6地点 位置図 (S=1:10000)



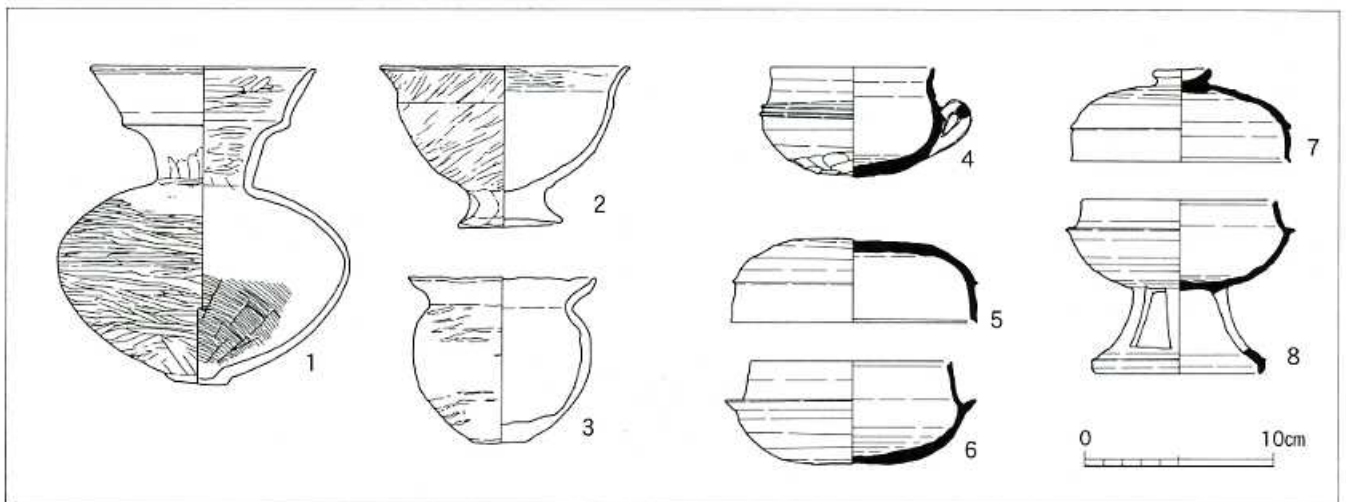
11区 竖穴住居跡 SB03



12区 弥生時代～古墳時代の遺構（北から）

弥生時代～古墳時代は、3つの時期に細分される。弥生時代中期、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代中期～後期である。弥生時代中期では12区で2棟の焼失した竖穴住居跡が見つかった。平面は円形、径約6mである。他にも土壙墓やピットなどを検出したが全体に遺構の密度は薄い。

弥生時代後期～古墳時代前期にかけて、11・12区ともに最も遺構が集中する。竖穴住居跡26棟、ピット多数、柵列、溝、井戸などがある。住居跡は平面方形で一辺5m前後、4本の柱で屋根を支え、中央に炉を持つ。中央部分に比べて周囲を一段高くするベッド状遺構を伴う住居（11区SB03・05、12区SB01・02など）や焼失住居（11区SB06・08）も見られる。住居内から出土した遺物には、讃岐など他地域産の土器もあり、当時の交流関係をうかがわせる。柵列は、12区北部から11区中程まで南北方向に3条が併行して走り、西に向かってコ字状に折れ曲がる。これによって区画される範囲は南北約60mである。柵列の構造は、幅40cm前後、検出面からの深さ約50cmの溝を掘り、径20cm前後の丸い木杭を隙間無く立て並べたもの。このような施設は各地の拠点集落、なかでもその中心部分で見つかることが多い。溝は、12区北端で2条見つかった。北西から南東方向に2条が併行して延びる。北側のSD15は幅約1.8m、深さ約40cm、SD16は幅約40cm、深さ約10cmである。井戸は、11区南部の住居跡SB03に南接して見つかった。平面形は不正円形で素掘り、径は約2.2m、深さ約1mである。その後、この井戸は徐々に埋まっていき、古墳時代中頃には深さが約60cmになっ



船場川東第6地点11区出土遺物実測図 (S=1:4) (1～3 SB08 4 SB09 5・6 SB10 7・8 SB19)

ていた。ここからは、多量の焼土、炭とともに大量の土器や有孔円盤などの祭祀具が出土した。

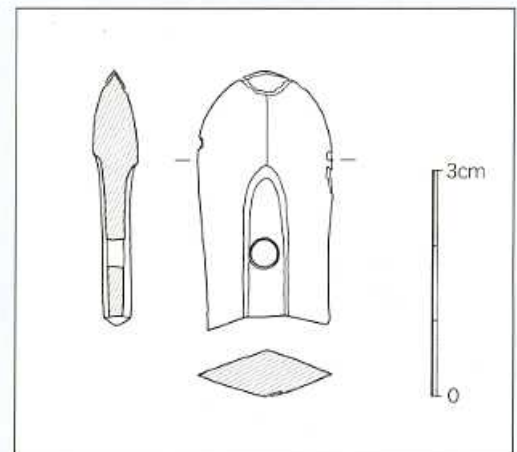
古墳時代中期～後期では、竪穴住居跡13棟、掘立柱建物跡1棟などが見つかった。住居跡の平面は全て方形で一辺の長さ5～7m、柱は4本である。11区SB09・10、12区SB03などには竈が作り付けられている。出土した遺物は、須恵器の杯身、杯蓋、高杯、把手付椀や土師器の甕などがあり、5世紀後半～6世紀前半の時期と思われる。掘立柱建物跡は、12区南部で見つかった。2間四方の東西棟で、東西約4.2m、南北約3.6mである。柱痕跡は、径約30cm。



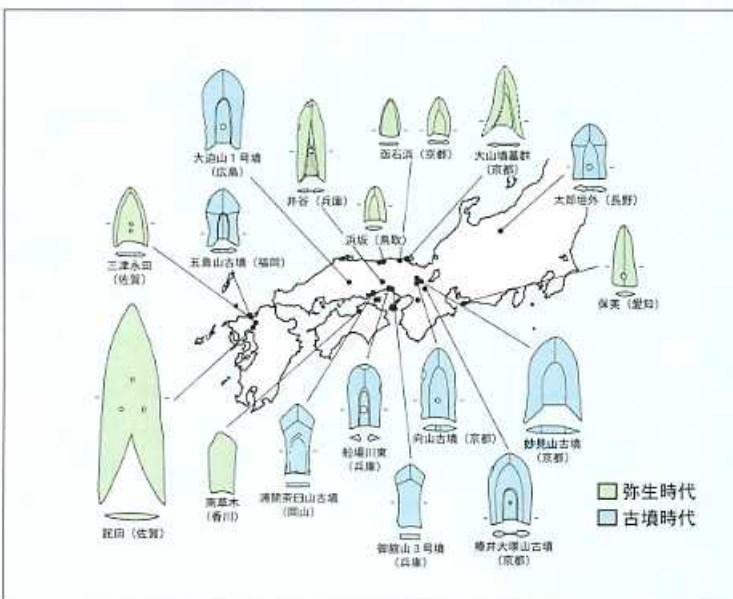
11区 竪穴住居跡 SB09 (東から)

住居跡出土の無茎銅鏃

11区の竪穴住居跡SB03から、無茎銅鏃と呼ばれる青銅製の矢尻が出土した。銅鏃は弥生時代～古墳時代にかけて作られ、全国で400ヶ所近くの遺跡が知られている。そのほとんどは、矢柄に装着するための突起のある有茎銅鏃で、突起の無い無茎銅鏃の出土遺跡は24ヶ所に過ぎない。その中でも、今回のものと良く似た銅鏃は、椿井大塚山古墳、妙見山古墳、大迫山1号墳など古墳時代前期の有力首長墓に副葬される例が多い。この種の鏃が首長墓の祭祀のみならず集落祭祀にも用いられ、二つの祭祀が緊密な関係にあったことを思わせる。



無茎銅鏃実測図 (S=1:1) 重さ 9.3g



無茎銅鏃の分布 (銅鏃はS=1:4)



銅鏃出土状況 (南から)

2. (仮称)

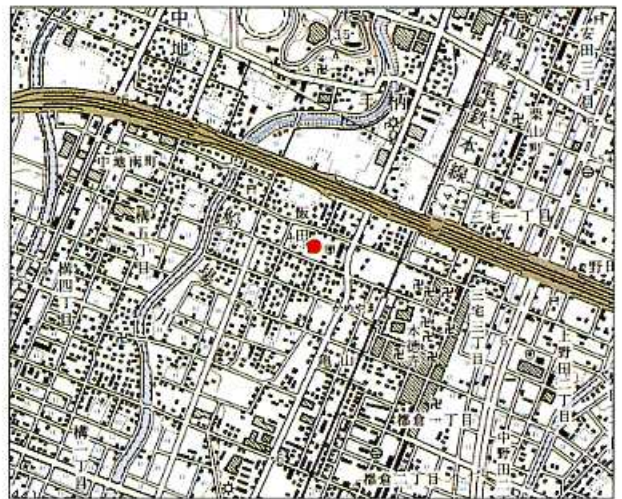
船場川東土地区画整理事業地内遺跡 第6地点13区 (第14次調査)

1. 所在地 姫路市飯田
2. 調査面積 391㎡
3. 調査期間 平成8年9月10日～平成8年9月30日
4. 担当者 大谷、小柴

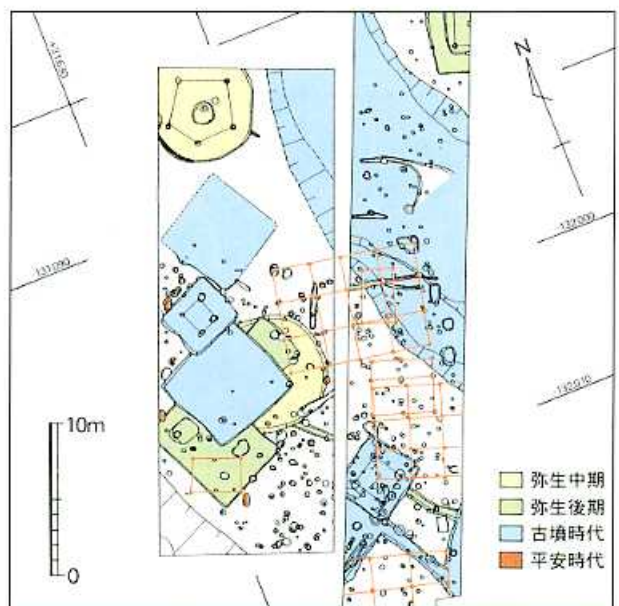
調査地は、第6次調査〔平成元(1989)年〕の1・2区に西接している。遺跡は北西から延びる微高地上に立地し、13区南西端では微高地端が顔を覗かせている。見つかった遺構は弥生時代中期～平安時代後半にかけてである。

弥生時代では、4棟の竪穴住居跡が見つかった。SB05、06は中期で、平面円形、径約7m、より残りの良いSB05では5本柱で中央に炉を持っていた。SB03、04は後期、平面方形で一辺4～5m。古墳時代の遺構は、3棟の竪穴住居跡と河道跡があり、時期は全て後期である。住居跡の平面形はどれも方形、SB02、07は一辺約5.5m、SB01は一辺約3.5mである。出土した須恵器などから6世紀前半頃と考えられる。河道跡は、1区を南流し13区北西をかすめて2区へと続いている。幅10m前後、深さ約1mである。

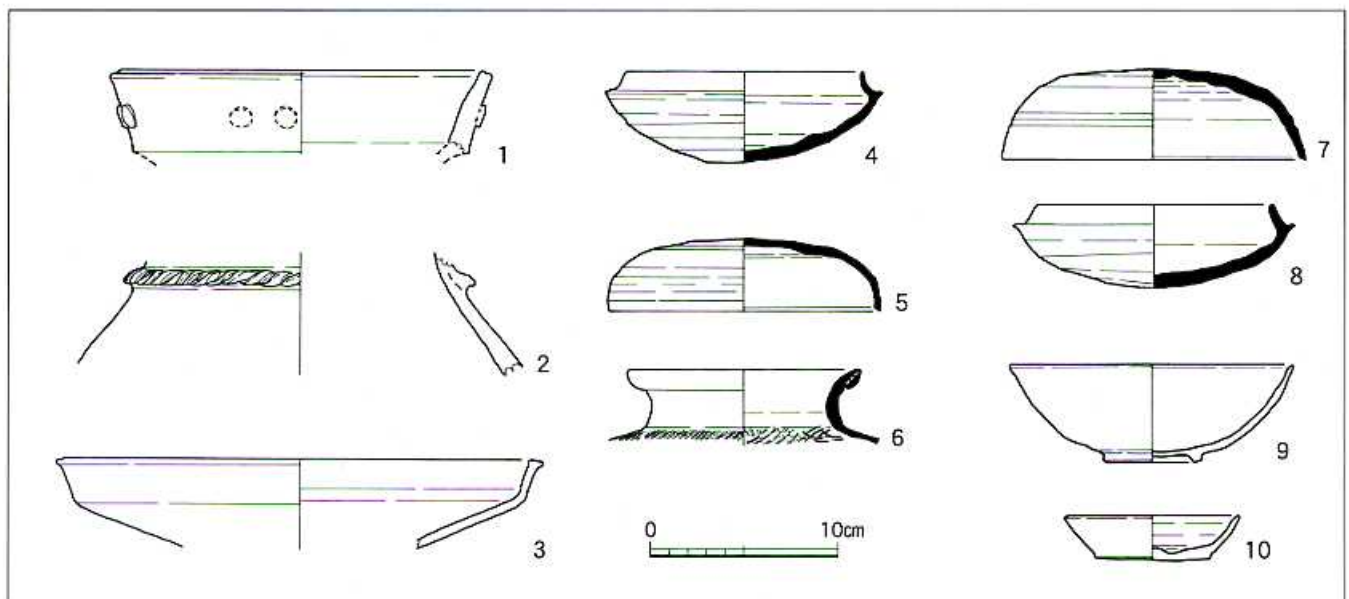
平安時代後半では200基近いピットが見つかった。この中で、掘立柱建物として確認できたのは2棟である。北側のそれは2区に跨がって位置し、東西4間、南北3間、方位をN-11°-Eにとる。南側の建物は東西2間、南北1間で、N-24°-Eに方位をとる。



調査地の位置図(「姫路南部」)



船場川東第6地点13区・1・2区平面図(S=1:500)



船場川東第6地点13区出土遺物実測図(S=1:4) (1・2 SB05 3 SB06 4 SB01 5・6 SB04 7・8 SB07 9・10 ピット)

3. 天満辺作遺跡（第4次調査） 東天満土地区画整理事業地内

1. 所在地 姫路市大津区天満字辺作
2. 調査面積 136㎡
3. 調査期間 平成8年6月11日～平成8年7月22日
4. 担当者 多田

天満辺作遺跡は、姫路平野海岸部の中列砂堆上に位置する。砂堆とは、海岸線の砂丘が微高地として残ったもの。天満付近では、周囲の水田よりやや高い砂堆として畑に利用されていた。地元では、「島畑」と呼ばれている。

発掘調査は、平成4（1992）年度から区画整理事業に伴い実施されている。

これまでの調査では、砂堆上から室町時代後半の土坑や曲物据付けの井戸などが見つかった。遺物も備前焼の播鉢や甕、土師器皿など中世後半を中心に出土している。また、砂堆南側の堤間低地からは、砂堆上から流れ込んだと推定される縄文時代後期～弥生時代にかけての土器も発見されている。その中には、吉備産と推定される弥生時代末の壺形土器も含まれていた。

今回の調査区は、昨年と同じく道路の拡張予定地である。第3次調査の調査区を挟んで南東側31㎡を1区、北西側105㎡を2区とした。

1区・2区とも駐車場などの盛土の下に、約20cmの暗灰色の砂質土層を挟んで、砂堆を形成する褐色砂層に至る。この面で10基余りの土坑やピットが検出された。

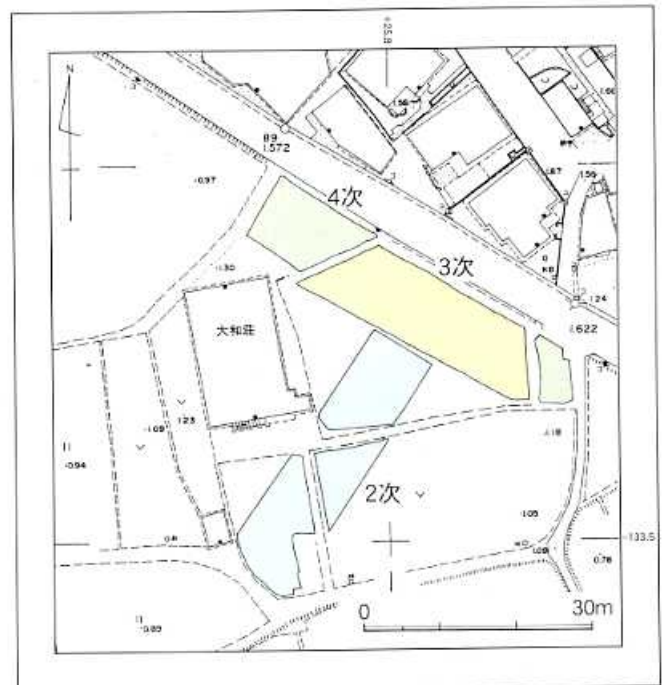
土坑やピットの埋土は、淡灰色や暗灰色のやや砂質土で、淡灰色の方が室町時代頃の遺構と見られる。しかし、ともに遺構からの遺物出土量は少なく、正確な時期は、限定しがたい。

2区の北端では、砂堆を形成する褐色砂層が北側へと下がっていく。ここが砂堆の北側（内陸側）の端と推定できる。

今回の調査区も、昨年につき砂堆の中央部であった。さらに、今回は砂堆の北端を確認することができた。



調査地の位置図（「網干」）



天満辺作遺跡 これまでの調査区配置図（S=1:1000）



2区 全景（南東から）

姫路城跡発掘調査の動向

平成8年度、姫路城跡では7ヶ所の発掘調査を行った。調査した個所は中曲輪の武家屋敷地の他、城門石垣や内・中堀など、城の各部にわたっている。発掘総面積は7,700㎡余りである。

中曲輪の調査は、お城本町地区および国立姫路病院で行った。お城本町地区の調査個所の一画には一時、姫路藩校「好古堂」が置かれていたことが知られている。調査の結果、その敷地と南側の武家屋敷地とを隔てる屋敷割りの遺構が見つかった。「好古堂」の敷地内では、姫路藩家老、河合家ゆかりの鳥の紋を描いた東山焼小皿や藩主の家紋入り軒瓦など、他の武家屋敷地とは異なる遺物が出土している。また、武家屋敷地の調査では、国立姫路病院から庭園の一部などの遺構が検出されている。

石垣修理に伴う城門の調査は、内京口門跡で行った。東側高石垣の上面で土塁状の盛土遺構を、また、石垣北側の土塁斜面では石階を検出した。

中堀に面する城門石垣を中心に、平成3年度から修理事業を続けてきたが、崩壊の危険性が高い個所の修理は、次の三国堀石垣で完了する。

内堀浚渫に伴う調査では、現護国神社裏手から瓦に経文を刻んだ「瓦経」55点が発見された。これらは、江戸時代に出土し、拓本とわずかな現物のみが知られていた「極楽寺瓦経」の一部であることがわかり、大きな話題となった。

平成9年度以降、国立姫路病院やお城本町地区などで大規模な発掘調査が進行している。これらの成果から中曲輪内の様相が明らかになっていくであろう。また、特別史跡地外の外曲輪でも、最近になって、ようやく調査のメスが入りはじめた。

平成8年度の姫路駅周辺土地区画整理事業に伴う遺跡確認調査では、南部外堀に関連する遺構が一部確認されている。現時点では調査成果を総括するまでに至っていないが、今後、外曲輪部分を含めた城郭の構造やその変遷の解明が求められよう。



お城本町地区の屋敷割り遺構



内京口門の石垣解体の様子



内堀の瓦経出土状況

遺跡を訪ねて

瓢塚古墳

姫路市勝原区丁

姫路市の西部、大津茂川中流沿いに位置する前方後円墳です。その形から瓢塚古墳の名前で親しまれてきました。

このあたりは『播磨国風土記』の大田里です。古墳の周囲には、縄文時代後期～平安時代にかけての集落跡である丁・柳ヶ瀬遺跡や白鳳時代の下太田廃寺など、古墳と前後する時期の遺跡が数多く知られています。

古墳は前方部を南側に向け、全長は約100mありました。後円部の高さは約7m。中央やや南寄りに石室の一部が露出しています。前方部は、南端に向かって広がり、三味線の撥のような形です。前方部の高さは4m余りで、後円部との比高差は大きい方といえるでしょう。周囲の濠は見つかっていません。これら墳丘の特徴や、いままでに採集された竹管文のある壺形土器などから、古墳時代の初めに築かれたと考えられています。今後、調査が進めば播磨における古墳出現期の貴重な資料となるはずですが、昭和53(1978)年には、国の史跡に指定されました。

◇あし 姫路市営バス丁停留所下車南東すぐ



瓢塚古墳の位置図（「網干」）



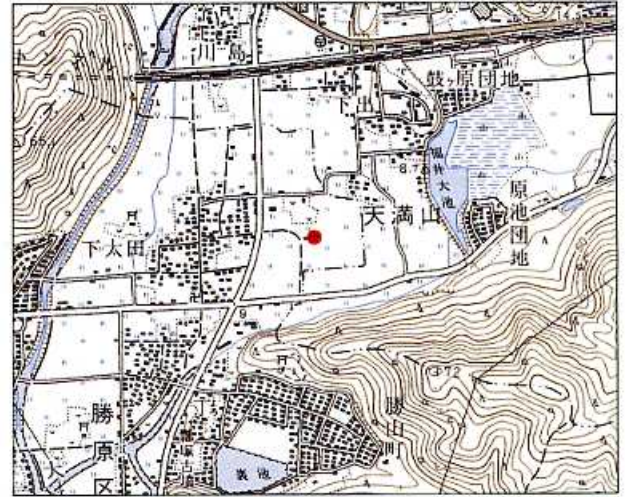
平面図 (S=1:1000)



航空写真

4. 下太田廃寺（第2次調査）

1. 所在地 姫路市勝原区下太田字ツクワ
2. 調査面積 247㎡
3. 調査期間 平成9年2月4日～平成9年3月28日
4. 担当者 大谷、小柴



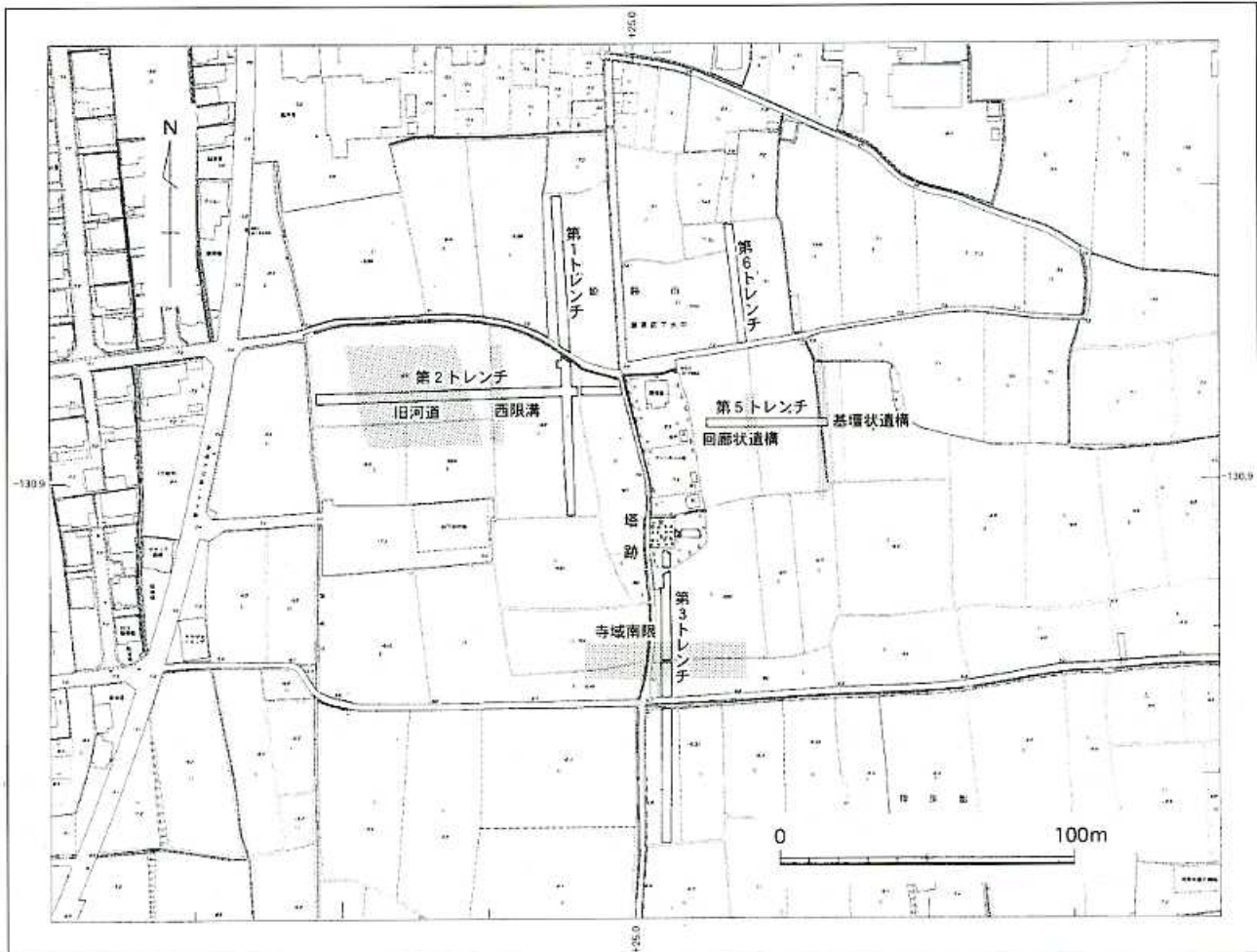
調査地の位置図（「網干」）

下太田廃寺は、採集された瓦から白鳳時代の創建と考えられてきた寺院跡である。昭和の初期には、その存在が広く知られ、昭和37(1962)年には塔跡が県史跡に指定されている。しかしながら、伽藍配置や寺域などその実態はほとんど分かっていなかった。

平成7(1995)年度、初めての発掘調査が行われた。4本のトレンチによって、寺域の南・西限を確認するなど多くの成果をあげた。今回の調査では、2本のトレンチ（第5・6トレンチ）によって、寺域の東・北限を把握することを目指した。

第5トレンチ

東端の畦畔直下で寺域東端を示すと思われる築地基壇状の高まりが見つかった。幅約3m、高さ約40cm。やや高くなる基盤層の上に厚さ約20cmの黄灰色礫混りの盛土を行っている。両側には、多量の瓦と河原石が散布していた。第1次調査の第2トレンチで確認した西限溝からこの築地状遺構までの距離は約110mである。



下太田廃寺 トレンチ配置図 (S=1:2500)

トレンチ中程には磨滅した瓦が一面に分布していた。この瓦を一部除去したところ、直下から回廊状遺構を検出した。幅約3.5mにわたって基盤層が高くなり、両側には2本の溝が掘り込まれている。西側の溝は幅約1.7m、深さ約15cm。鴟尾、平瓦、凝灰岩塊などが出土した。東側の溝は幅約6m、深さ約30cm。溝内からは多量の瓦が出土した。これらの瓦には軒瓦が多く、また遺存状況も良好であった。おそらく、回廊状遺構の屋根瓦が東側溝に落下したものと思われる。東端の築地状遺構からの距離は約26mである。

第6 トレンチ

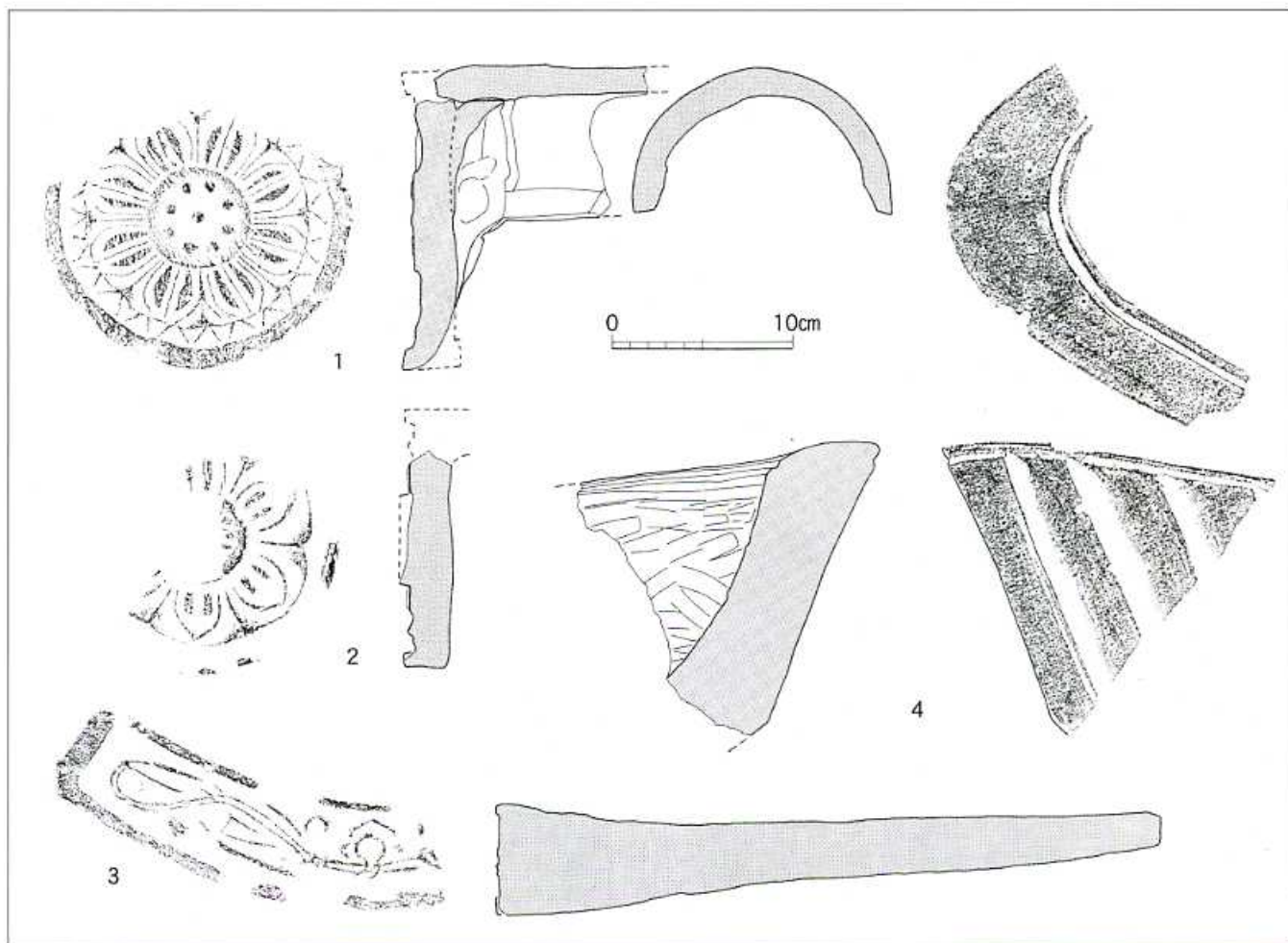
寺院に関連する遺構は掘立柱建物跡1棟のみで、北限を示す施設は検出されなかった。第1トレンチでも同様であったことから北限を示す明瞭な施設を設けていない可能性もある。南端で見つかった建物は、方位をほぼ座標北にとる。規模は柱間約3mで南北4間、東西は調査区外となるため不明である。他にも、弥生時代後期の竪穴住居跡や室町時代の溝などを検出した。



築地状遺構（北から）



回廊状遺構（北から）



下太田廃寺第5トレンチ出土瓦実測図 (S=1:4) (1・3 回廊状遺構東溝 2 瓦溜り上層 4 回廊状遺構西溝)

5. 坂本城跡（第6次調査）

1. 所在地 姫路市書写字構江2459-1
2. 調査面積 200㎡
3. 調査期間 平成8年11月15日～平成8年12月6日
4. 担当者 秋枝

坂本城は播磨国守護赤松氏の守護所として、また嘉吉の乱(1441)の舞台となった城としても著名である。増田重信氏は坂本城に注目され、詳細な分布調査や字限図から「姫路市書写西坂本字構江」に城跡を比定された。また、『慶長六年飾西郡東坂本検地帳図』から城跡が江戸時代初頭には溜池となったことを明らかにされた。

坂本城跡は姫路市教育委員会によって、計5次におよぶ発掘調査が行われた。調査の結果、周囲に堀と土塁が巡り、東西170m・南北170mの規模であることが判明した。城の時期は14世紀末を上限とし、下限は16世紀初頭で、さらに郭内の遺構の遺存状況が悪いことも分かった。

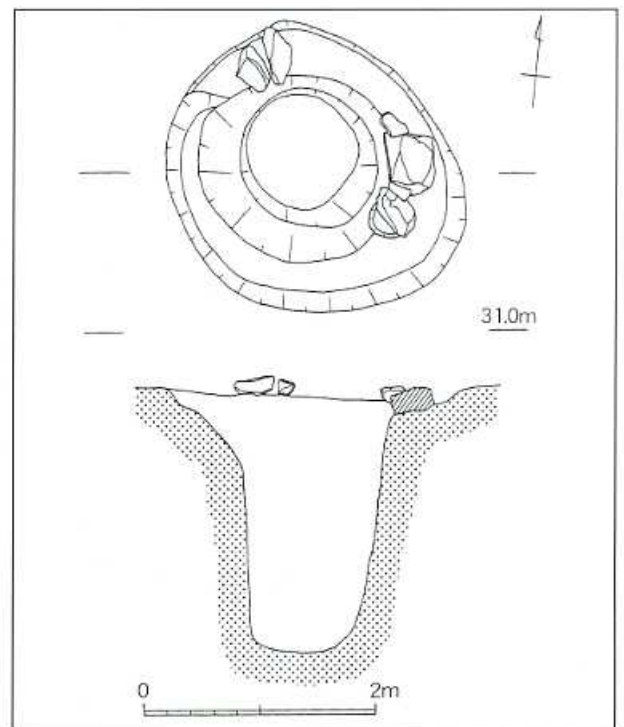
多田暢久氏は『城郭研究室年報』Vol.1で、これらの調査成果に基づき坂本城跡の縄張りについて考察した。

このたび郭内で宅地開発が計画され、遺構の保存状況を把握するために遺構確認調査を実施した。調査は幅4m・全長30mのトレンチを設定して実施し、後述する井戸・溝が確認された部分は拡張して調査を実施した。

耕作土(20cm)・灰褐色床土(5～10cm)をへて黄灰色土に達する。ただ、中央部では灰褐色床土の下に青灰色粘土(3～15cm)があり、これは廃城後溜池になったことを裏付けるものであろう。この土層内から戦国時代の備前焼や江戸時代の唐津焼などが出土した。その下の黄灰色土を掘り込んで井戸・溝などの深い遺構が認められる。



調査地の位置図（「姫路北部」）



井戸実測図



井戸検出状況（西から）



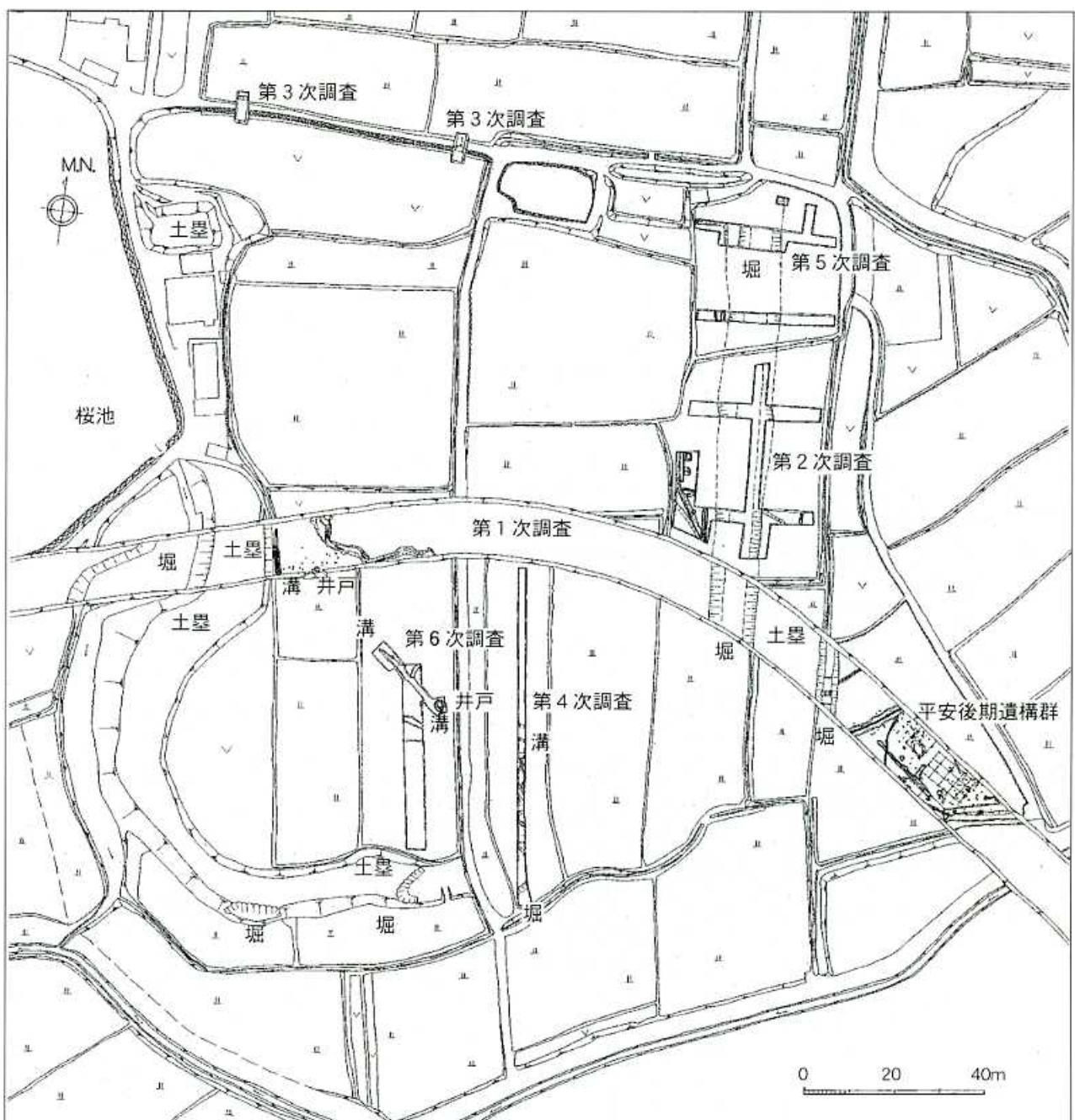
溝検出状況（東から）

井戸は調査区北端で1基検出した。径1.2m・深さ2.3mの素掘りの井戸である。ただ、上面は角礫で1から2段化粧をしている。井戸内の青灰色泥土から15世紀初頭の土師器皿・埴、青磁碗、用途不明の木製品が出土した。井戸に近接して溝が1条認められる。この溝は調査区西端で途切れ、第4次調査で確認した溝が西へ延びているのであろう。溝内から完形品に復元できる土師器皿・埴をはじめ備前焼插鉢、瀬戸美濃焼天目茶椀、輸入磁器など、14世紀末～15世紀中葉にかけての遺物が多数一括出土した。

なお、溝内から12世紀後半～13世紀初頭にかけての遺物も出土したことを付言しておこう。



溝内出土瓦質土器、中世須恵器、備前焼



坂本城跡調査位置図

6. 姫路駅周辺遺跡 (第4次調査)

1. 所在地 姫路市朝日町・駅前町
2. 調査面積 1,270㎡ (トレンチ6本・試掘坪30ヶ所)
3. 調査期間 平成9年3月1日～平成9年3月28日
4. 担当者 秋枝

本年度は、朝日橋西側の姫路駅構内の国鉄清算事業団所有地で埋蔵文化財確認調査を実施した。当該地の北部で姫路城跡南部外堀の検出が予想されることから、幅4m・全長25mのトレンチを南北に6本設定して外堀の確認に努めた。現地表面から30～40cm下で安定したコークス殻混じりの盛土を確認した。この盛土の最下部で間知石を使用した石組溝や花崗岩製の礎石等を確認した(第1～3トレンチ南端)。第1・2トレンチ南端で南と北に石組溝を1条ずつ確認した。その距離は芯々で3.2mである。溝内から汽車土瓶・煉瓦・ガラス瓶などの遺物が出土した。さらに80～85cm下で耕作土上面に達する。第1～第4トレンチ北端で、凝灰岩を2～3段使用した石組溝(幅1.8m)を検出した。溝内から伊万里焼・備前焼などの江戸時代後半の遺物が多数出土した。石組溝を第1～第4トレンチ間で、東西に約150m分確認したこととなり、この溝は東および西にさらに延びる。南部外堀が今回の調査で確認されなかったことは、南部外堀はさらに北側の調査区外の道路や宅地で確認できる可能性が高まった。

南部で試掘坪30ヶ所設定して遺跡確認に努めた。耕作土を剥ぐと床土をへて平安時代後半の包含層となり、安定した黄褐色土に達する。黄褐色土を掘り込んで平安時代後半のピット・溝・土坑などを確認した。

したがって、今回の調査では、姫路城跡に関する遺構のみならず、平安時代後半の集落跡と近代遺跡姫路駅の三時期の遺構・遺物を確認した。



調査地の位置図(「姫路南部」)

盛土 (30～40cm)	平成時代
	昭和と大空襲
盛土 (80～85cm)	大正・明治時代 (姫路駅)
	石組溝・ゴミ穴
耕作土 (20cm)	江戸時代 (城下町)
	石組溝
床土 (10～20cm)	
包含層 (10～15cm)	平安時代 (集落跡)
	ピット・溝・土坑
黄褐色土	土器細片 (縄文土器カ)

土層模式図



第2トレンチ江戸時代後半石組溝(東から)



第2トレンチ近代石組溝(東から)

7. 北条遺跡 (第1次調査)

1. 所在地 姫路市北条
2. 調査面積 1,800㎡
3. 調査期間 平成8年12月1日～平成9年2月28日
4. 担当者 秋枝

姫路駅周辺土地区画整理事業に伴い、平成5(1993)年度から埋蔵文化財の確認調査を実施している。調査の結果、新たに遺跡が3ヶ所確認され、西から順次(仮称)姫路駅周辺第1・2・3地点遺跡と呼称することとなった。第1地点については、兵庫県教育委員会と協議の結果、今後「北条遺跡」として遺跡登録をすることとなった。

区画整理道路部分については姫路市教育委員会が、近接して構築される高架橋部分については兵庫県教育委員会が発掘調査を実施することとなった。兵庫県教育委員会の調査終了後、平成8年12月1日から発掘調査を開始した。

当該地は姫路市土地開発公社の所有地で、確認調査で弥生時代前期～平安時代後半にかけての遺構・遺物を確認した。調査区は約1m盛土され、その下に耕作土(15～20cm)・灰褐色床土(20～30cm)・暗褐色土(15～20cm)・黄褐色土(30～50cm)がある。遺構は黄褐色土を掘り込んでいる。

調査区東端で遺跡の東端を画する旧河道を確認した。旧河道内から弥生時代前期の壺・甕・鉢・高杯や木製品が多数出土した。また、中層から7世紀末～8世紀初頭の須恵器杯・高杯・壺、土師器杯・甕、布目瓦、円面硯が、上層から12世紀後半の中世須恵器碗・鉢・甕、土師器杯、輸入磁器の碗・皿が多数出土した。このように、旧河道内から層位的に遺物が多数出土したことは貴重な成果といえよう。

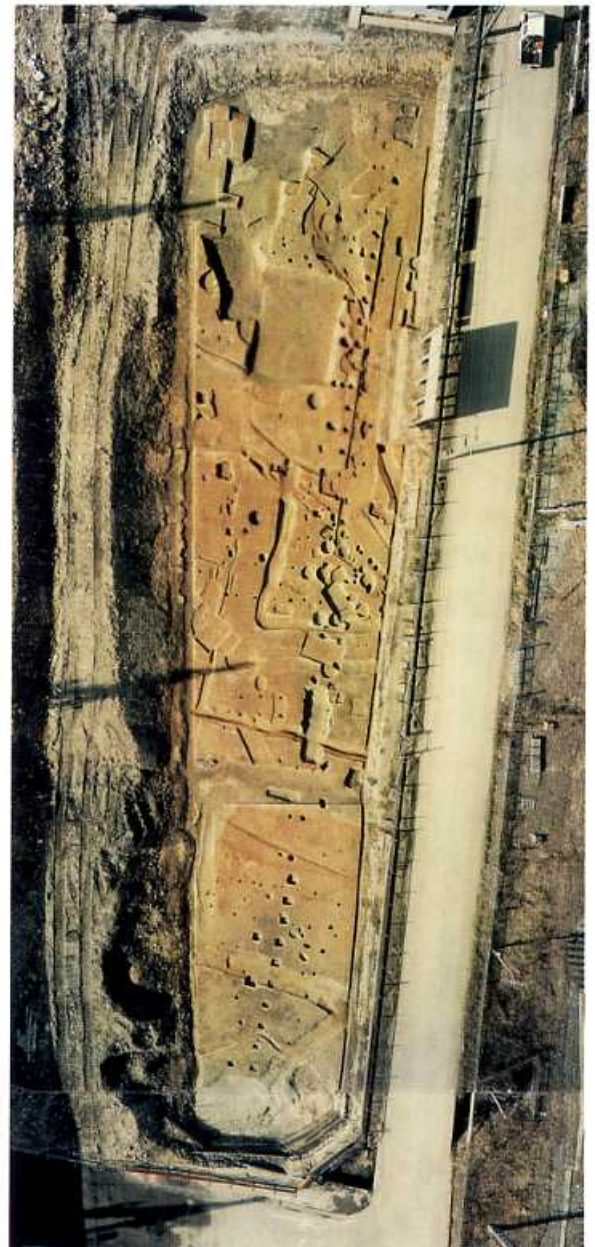
旧河道から西側、微高地では弥生時代前期の溝・土坑、弥生時代中期後半の土器溜り、7世紀末の掘立柱柱穴列(柵カ)・大型土坑・溝・素掘り井戸、12世紀後半の溝・柱穴・土坑などを確認した。

とくに、白鳳時代の遺構は、旧河道を挟んで東方にある(仮称)姫路駅周辺第3地点遺跡(市之郷廃寺関連遺跡)に関係すると思われ、瓦をはじめ遺物の詳細な分析が必要となる。

なお、遺跡はさらに西側に延びる可能性がある。西端を確認するためにも朝日橋西側については、物件の移転後確認調査を実施する必要がある。



調査地の位置図(「姫路南部」)



航空写真

8. (仮称) 谷内地区圃場整備事業地内遺跡 (第1次調査)

1. 所在地 姫路市飾東町小原・小原新
2. 調査面積 500㎡ (試掘坪125ヶ所)
3. 調査期間 平成8年12月19日～平成9年1月30日
4. 担当者 秋枝

姫路市農政局農林水産部耕地林務課より平成7年5月12日付で、姫路市教育委員会に、飾東町谷内地区で県営圃場整備事業を実施するにあたり、埋蔵文化財の分布調査の依頼があった。事業予定地内には周知の埋蔵文化財包蔵地は確認されていない。しかし、山陽自動車道建設に伴う発掘調査で、大釜地区の山麓で加西市法華山一乗寺に瓦を供給した江戸時代の瓦窯跡が確認されたことから、埋蔵文化財の分布調査を実施した。調査の結果、遺物散布地が5ヶ所認められたことから、事業に先駆け埋蔵文化財の確認調査を実施することとなった。

調査地は姫路市東部、飾東町谷内地区で加西市・加古川市に近接している。南北に狭い谷間に天川が蛇行しながら走り、畦畔もかなり乱れておりあたかも氾濫原のような状況を呈している。

調査の結果、天川を挟んで東西30～50mの範囲では、耕作土・床土をへて、砂層ないしは泥土となることが分かった。旧河道内の堆積状況を示しているが、出土遺物に恵まれなかった。

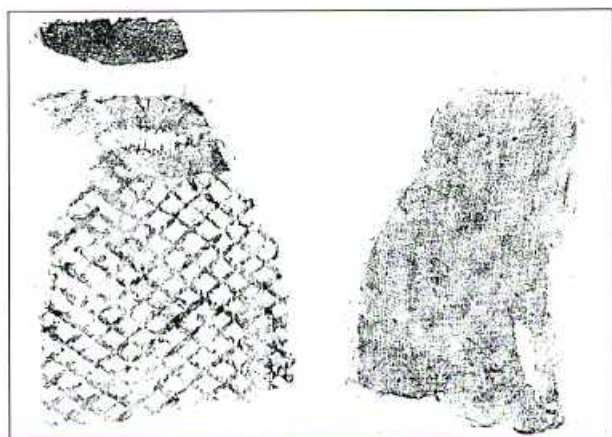
天川を挟んで東および西の山際では、耕作土・床土(床土の下に一部薄く灰褐色土の堆積している坪もある)をへて、山土ないしは黄褐色土の安定した地盤となる。床土内から磨滅の著しい須恵器・土師器・中世陶磁器・近世陶磁器が出土した。しかし、遺構を確認することができなかった。

以上、各坪で磨滅の著しい遺物が出土したが、いずれも遺構に伴うものではない。今回の調査で天川を挟んで東西に幅30～50mの旧河道を確認したが時期は不明である。今後、立会いなどを含めた詳細な調査が必要となる。

小原地区で現高1.6mの花崗岩製で空風輪を欠失する五輪塔がある。「敬白奉造立石塔一基 右志趣為自他法界平等利益也敬白 ア(梵字) 建武四(1337)丁丑十二月十三日 大原□□□施主 敬白」と銘文が刻まれている。銘文を有する五輪塔としては県内でも古い遺例である。この五輪塔は兵庫県姫路土地改良事務所と地元の努力で現状保存となった。



調査地の位置図(「笠原」)



第12坪出土布目瓦拓影 (S=1:3)



小原地区五輪塔(東から)

●こんなものでました●

鳥形木製品

出土遺跡：四ツ池遺跡 姫路市町坪四ツ池^{ちようのつぼ}

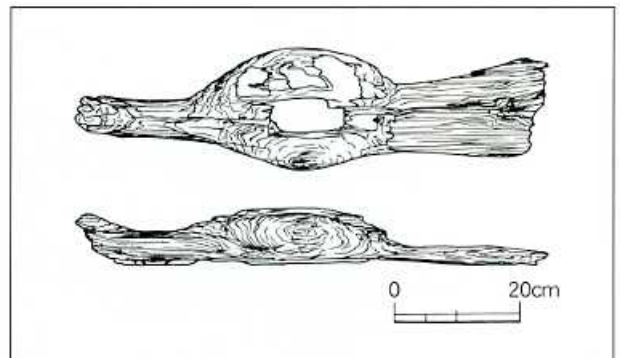
「日本武尊の魂は白鳥に姿を変えて飛び立っていった。」

この伝説に見られるように、昔から鳥は魂や神の霊を運ぶもの、その象徴と考えられ、鳥をかたどった様々なものが作られてきました。鳥形木製品もその内の一つで、主に弥生時代～奈良時代の遺跡で見つかっています。板状のものや丸彫りのものがありますが、大きさや形は定まっていません。用途は、弥生時代には農耕儀礼、古墳時代には葬送儀礼と時代によって変化すると考えられています。

今回、見つかった鳥形木製品は、市内にお住まいの福島敏之さんが水の引いた四ツ池の池底から発見されました。全体のフォルムは立体的で首の長い水鳥と良く似ていますが、頭は失われています。現存の長さは76.1cmで、鳥形木製品の中では大型といえます。胴の中心には四角い穴が空いていて、そこに棒を差し込んで使われていたのでしょうか。良く似たものが奈良県の古墳から見つかっていますが、四ツ池の鳥形木製品は発掘調査で見つかったものではないので、時代や用途を決めるてがかりがほとんどありません。一体いつ、誰が、何のために作ったのかは謎のままです。



出土地位置図（「姫路南部」）



鳥形木製品 実測図



鳥形木製品

TSUBOHORI

平成8年度（1996）

姫路市埋蔵文化財調査略報

平成10年（1998年）3月31日

発行 姫路市教育委員会 文化部 文化課
姫路市安田四丁目1番地
印刷 クリヤ印刷所
姫路市広畑区正門通4丁目2-9

まめだぬき
しばこの

じゃーん!
これが
私の掘った
堅穴住居です

30秒考古学



ほー
大昔の家は
部屋が4つ
あったのが

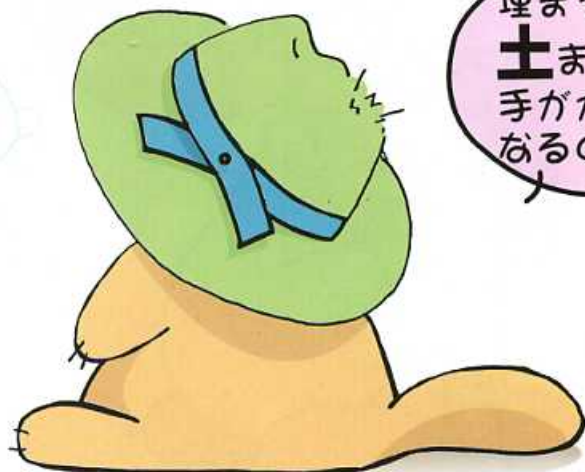
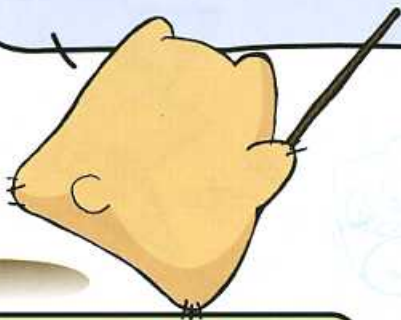
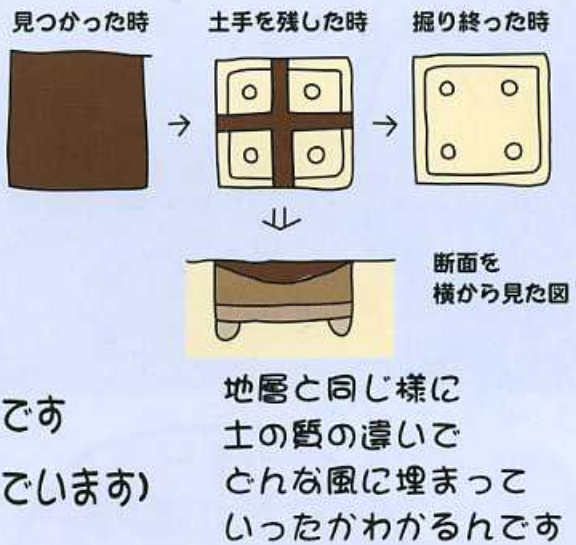
ちっ
違っんですー!





船場川東土地区画整理事業地内遺跡
第6地点11区

上の写真が、本当に
掘り終わった後のものであ
さっきの仕切りは
竪穴住居に埋まっていた土を
観察するために
わざと掘り残していただけなんです
(私達は土手とかあせとか呼んでいます)



埋まってる
土まで
手がかりに
なるのだな

■平成8年度
姫路市埋蔵文化財調査略報付録
発行/
姫路市教育委員会文化部文化課
姫路市安田四丁目1番地